

巻 頭 言

別府大学日本語教育研究センター長

松 田 美 香

別府大学日本語教育研究センターが2009年4月に設立されてから、今年度で丸4年が経ちました。大学では、今年度初めての卒業生を出す年になりました。

体系的で効率的な日本語教育の環境を整備し、全学の留学生への学習支援をより充実したものにするため、今年度はカリキュラムの改編に努めました。能力別クラス編成に加え、各技能別にクラスを上下することが可能になり、得意・不得意に応じた日本語の授業を受講することができるようになりました。このことは、偏った日本語能力を持つ留学生を、滑らかに上級レベルへと引き上げるために必須の作業でした。当然、それに伴う教務上の煩雑さが生じましたが、それに見合うだけの成果が上がった年となったと自負しています。

このような作業は、次の課題である「年次を上げた日本語教育科目の充実」にも及びました。次年度に向けては、留学生が希望すれば3年（短期大学部は2年）まで日本語教育をバックアップする体制を準備しているところです。

一方、教育の改善に資する研究のための『別府大学日本語教育研究』も、本号で第3号となります。教育実践をつうじて得られた問題意識や気づきにもとづく研究・報告を掲載するという機会を有効に利用していただきたいところですが、前述のような改編期と重なり、論文数は伸び悩む結果となりました。

しかし、このことは研究が停滞していることを意味するものではありません。むしろ、本センターが新たな挑戦をしている最中であり、その結果を出す時期はもう少し先になると捉えるべきだと思います。各教員の中で実践が続けられ、問題意識が芽生え、それが豊かな研究として実るまで、今しばらくの時間が必要ということでしょう。

近隣諸国との関係が予断を許さない現代。日本語教育は、「懸け橋」になってくれる人材を直接的に育てるという役目を担っていることを再確認しなければなりません。学習者の個性や可能性を尊重してその成長に寄与するものでありつづけること。本センターは、そのための努力を惜しまず、邁進していくことを誓います。

最後に、本号の刊行にあたっては、多くの方々に様々なかたちでご支援をいただきました。この場を借り、改めて厚く御礼申しあげます。

平成24年 3月25日